
豆まき

川島徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豆まき

【著者名】

川島徹也

【あらすじ】

今日は節分だ。俺は豆まきをしながら毎年思い出すことがある。

(前書き)

思い付きで書いた即興小説です。

今日は節分の日だ。

毎年この時期になると妹の言葉を思い出す。

春になつたら俺が大学生になる年のこと。

俺は四歳年下の妹と豆まきの準備をしていろとひき、妹が独り言のように呟いた。

「鬼は外、福は内って言ひでしょ」

「ああ

「つてことはさ、豆まきする前から鬼がいるってことになるよね」「そうかもしれないな。わざわざ豆まきするだけの為に鬼を入れたりしないからな」

妹は豆の入つた真空パックを開けながら続ける。

「その年に鬼を外に出しても、また来年までには鬼は溜まつてゐる事だよね」

「そうだな

「それはどうして溜まるんだろうね」

「さあな。きっと俺達が持つて帰つて来るんだろうな。」

「そもそもしれないね。準備できたよ。お兄ちゃん」

たくさん豆の入つた紙コップを手渡される。

升を使うのが一番良いのだが、そんな物は家には無いので代用品として使つている。

まあ、用途もだいたい一緒だし、いいんぢやないとのことだった。

「鬼は外、福は内」

俺は妹より一段高い軌道で豆を投げる。

「鬼は外、福は内」

「なんか、いまいち盛り上がりないね。」

「豆まきってそんなにエキサイトする行事だったっけ」

「そうだ、お兄ちゃん鬼やつてよ」

「いたた」

機関銃の如く豆を投げる妹。

「やっぱり標的があつたほうが投げやすいね」

「家庭内暴力だぞ」

そう言いながら逃げ回る俺。

「春になつたらお兄ちゃん一人暮らしでしょ。鬼なんかに負けないで
よ。頑張つてね」

あの時は目から涙が出そつになつたなよ。

そして今年は一人寂しく豆まきをしている。

ああ、あの頃に戻りたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4796b/>

豆まき

2010年10月31日04時40分発行